

熊本博物館所蔵の「横矢旗」について

竹原 明理

一・はじめに
熊本博物館（以下、当館）では、令和三年（2021）より収蔵絵画調査を実施した。令和六年（2024）三月には、『熊本博物館収蔵 絵画目録（1）』を刊行した。本調査によつて、当館にはさまざまな絵師の作品が多数収蔵されていることが改めてわかつてきた。そのうちの一作、椿椿山画・深水春山贊《深水春山像》については館報34号で紹介し¹、令和六年度の収蔵品展『くまはくコレクション』かがやけ！熊本の刀と絵画』でも多数の絵画を展示した²。

本稿では、長らく当館に所蔵され、定期的に公開の機会がありながら、その詳細はほとんど言及されてこなかつた「横矢旗」八点について報告し、若干の考察を加えたい。

二・「横矢旗」とは

横矢旗は、端午の節句の飾りの一種で、縦が七〇～一〇〇cm程度、横が長いもので十数メートルにもなる巨大な絵巻のようなものである。そもそも「横矢旗」という語はあまり知られてはいないだろう。文献検索をしても、当館館報に掲載された展示記録がヒットする程度である。端午の節句や鯉のぼりに関する研究は多数あるが、横矢

旗に関する先行研究はほぼ無いのが現状である。当館では「横矢旗」という語を違和感なく使用してきたが、そもそも横矢旗とは一体どのようなものなのか、現状わかつてゐる範囲で記しておきたい。

『熊本県大百科事典』（熊本日日新聞社熊本県大百科事典編集委員会編、一九八二年）を引くと、横矢旗は「矢旗」の項にその一種として記載され、端午の節句に飾つたものとわかるが、詳しい説明はない。『新熊本市史』（別編第二巻、一九九六年）には、昭和六二年（一九八七）に白石巖氏（一九二一～一九九五）³が現在の熊本市中央区京町の民家で撮影した飾り付けの様子が掲載されている。横矢旗の使用例を記録したほぼ唯一の



【写真1】

写真として大変貴重だが⁴、本文中での説明はない。なお、本画像のポジフィルムは現在、熊本県博物館ネットワークセンターに収蔵されている。『新熊本市史』掲載画像とやや画角が異なるが、同時に撮影された画像の一つを本稿にも掲載する【写真1】。^ち乳に紐を通して、ぐるりと屋根下に廻して飾り付けられている様子がよくわかる。

次に、「横矢旗」という語の使用についても見ておきたい。たとえば、熊本県立熊本高等学校の初代校長・野田寛（一八六六—一九四五）による口述を記録した『肥後文教と其城府の教育』（一九五六年）には、「かの明治の時代まで町家に横矢旗が張られ、今日端午の節句に金時、桃太郎は言ふに及ばず、勇ましき武者絵の幟の翻翻たるを見る時、武士の感化が如何に普ねく徹底してゐるかゞ想察せらるゝ」とある⁵。野田は、横矢旗は明治期のもので、以後は金太郎や桃太郎などの武者絵の幟を掲げるのが主流となつたと認識していたことがわかる。

一方で、大正二年（一九一三）四月一八日付『九州日日新聞』では、「玩具のいろいろ」と題して、新町二丁目（現在の熊本市中央区新町）にあつた炭谷玩具店の店頭に並ぶ夏用玩具を紹介する中で、「横矢旗は一間もので一円四、五十銭とこれも立派な絵である」と伝えられる⁶。同記事からは、横矢旗の当時の具体的な値段がわかるが、一間を約一・八二mと換算し、現存する横矢旗が数メートルになることを考えると、一間単位の長さで注文を受けていた可能性もある。

以上のように、新聞記事等で普通に「横矢旗」という言葉が使われていることから、少なくとも明治・大正期の熊本城下町では、端午の節句の際に横矢旗を飾る風習があり、その用語も一般に知られていたと考えることができる。しかしながら、現在はその存在を知る人はほとんどいない。本稿執筆にあたり、県内の節句用品や玩具を取り扱う店舗にも問い合わせたが、残念ながら情報は得られなかつた。

次に、「横矢旗」という語の使用についても見ておきたい。たとえば、熊本県立熊本高等学校の初代校長・野田寛（一八六六—一九四五）による口述を記録した『肥後文教と其城府の教育』（一九五六年）には、「かの明治の時代まで町家に横矢旗が張られ、今日端午の節句に金時、桃太郎は言ふに及ばず、勇ましき武者絵の幟の翻翻たるを見る時、武士の感化が如何に普ねく徹底してゐるかゞ想察せらるゝ」とある⁵。野田は、横矢旗は明治期のもので、以後は金太郎や桃太郎などの武者絵の幟を掲げるのが主流となつたと認識していたことがわかる。

では、実際にどのような横矢旗が存在したのか、当館が収蔵する八作品の各情報を整理しておきたい。作品名・法量等の情報は【表1】のとおりである。当館収蔵品DBの情報を確認する限り、これらは一九六〇年代後半から七〇年代にかけて当館に寄贈されたと考えられるが、残念ながら寄贈元の記録が残っていないものも多い。寄贈元の情報があるものでも、旧蔵者の転居など本来伝來した地域と異なる場所からの寄贈である可能性もある。とはいっても、ほとんどが熊本城下からあまり離れていない地域から寄せられたものである。

作品は、いずれも全体を厚めの和紙で仕立て、濃藍色などに染めた紙や布で本紙を縁取りし、縁と同じ材で主に本紙の上部に紐を通すための乳がつくというのが共通する形状である。紙製とはいえ、【写真1】のように主に屋外で使用するため非常に丈夫に作られているが、繰り返しの使用や降雨による水損などで本紙の破れなど劣化が著しい。今後の修理や保管方法など、検討すべき課題は多い。以上を考慮したうえで、各作品の概略を見ていく。

①松岡敬廉『山崎合戦図』一巻

冒頭の破損が甚大だが、「文管斎」「敬廉之印」という二つの印を確認することができ、本作の作者は松岡敬廉という絵師であることがわかる。敬廉は、熊本藩御用絵師・矢野家の六代・良敬の弟子である。安政六年（一八五九）生まれで、父祖は狩野派を学んだ絵師であった。本名を「七郎」といい、号に「觀山」「文管斎」「皓月庵」などがあ

あり、後に「来茂」と改名した⁷。敬廉の作品としてはほかに、『熊本城南面大観図』（熊本城顕彰会蔵・当館寄託）、『藤崎八幡祭礼絵巻』（島田美術館蔵）のほか、同じく矢野派の赤星閑意・松山敬誠との共作『群芳帖』（永青文庫蔵）などが確認されている。

本作は、明智光秀勢と羽柴秀吉勢が衝突した「山崎の戦い」（一五八二年）を描く。庶民に広く読み親しまれた『絵本太閤記』などを基にし、清正に関する逸話をメインに構成したものとなっている。冒頭の場面は、明智勢と羽柴勢の激突が始まつた様子を描く。主要な人物には、「比田帶刀」「斎藤倉之助」「明智光秀」「阿部仁右衛門」「高山右近」「羽柴秀吉」など武将の名前を記した紙が貼付されている。羽柴勢のやや後方には「加藤虎之助」（清正）の名も確認できるが、どの人物かは特定しづらい。

次の場面は、優勢になつた羽柴勢が明智勢を討つ様を描き、加藤虎之助が斎藤倉之助に馬乗りになつてゐるところ、倉之助の父・斎藤伊豆守が息子を助けようと虎之助を攻撃しているとされる描写や林半四郎に苦戦する羽柴勢の描写がある。

最後は、光秀が敗れたことを知つた明智左馬之助（秀満）が馬で琵琶湖を越えたという伝説の場面を描く。湖岸に左馬之助を逃してしまつた羽柴勢がいる⁸。

②矢野派『九州平定図』 一巻

当館収蔵品DBによると、本作は昭和四五年（一九七〇）に現在の熊本市中央区新町四丁目の個人から寄贈されたものである。

作者は特定できないが、筆致から矢野派の絵師によるものと推定される。天正一五年（一五八七）の豊臣秀吉による島津氏制圧の様子を描く。これもまた庶民に広く読まれた『豊臣鎮西記』『絵本太閤記』『賤岳合戦記』などを基にしつつ、清正の逸話を主軸に構成されている。

本作も冒頭の破損が甚大だが、「秀吉御九州下向」と記された金紙が貼り付けられ、九州へ向かう船団が描かれている。秀吉が乗船する五三桐紋の帆を掲げた船の隣には、蛇の目紋を据えた清正の船が陣取つてゐる。

小倉城に入った秀吉一行は、小倉城内で相撲を観覧する。土俵に立つたのは、清正家臣の木村又蔵と毛谷村六介（のち貴田孫兵衛）である。六介は、又蔵に敗けたことにより清正家臣になつたという。その後、「築前岩関之城」「蒲生氏御遠巻」の場面を経て、清正と赤星太郎兵衛（親武）の対峙が描かれている。清正家臣の森本儀太夫と木村又蔵も大急ぎで駆けつけてゐる。太郎兵衛は、菊池氏の一族から出た家柄で、後に加藤一六将の一人に数えられた武将である。

さらに場面は進み、清正と島津勢・新納武藏守（忠元）との戦いが描かれ、忠元を加勢すべく、川上左京太夫（忠堅）が駆けつける。忠元の落馬は清正にとつてチャンスだったが、清正はあえて忠元を討たなかつたという逸話を表す場面である。

川内川の戦いの後の場面には、「秀吉公泰平寺出座」との貼紙があり、泰平寺において島津義久・義弘が秀吉に降伏する場面を描く。一

番最後は、「笛崎八幡宮九州大名知行配当」として、笛崎宮に諸大名が集結し、領地を分配する光景が描かれる。

③矢野派《賤ヶ岳合戦図》 一巻

本作は、羽柴秀吉と柴田勝家が衝突した賤ヶ岳の合戦（一五八三年）のうち、清正の働きをクローズアップして描いたものである。特にこの戦いで清正は「賤ヶ岳の七本槍」に數えられ、清正の武功を語る上で代表的な合戦の一つである。

本紙に大きな破損はないものの、乳が全てガムテープに置き換えられている。繰り返し使用する中で、本来の乳が劣化・破損したため付け替えたのだろう。「賤ヶ岳の七本槍」に数えられる武将の戦功を中心には描かれているが、登場人物や場面は次に記す④の横矢旗と内容や構図が近似している。

④矢野派《賤ヶ岳合戦図》 一巻

当館収蔵品DBによると、本作は昭和四二年（一九六七）に現在の熊本市西区春日（旧・春日町）の個人から寄贈されたものである。③と同じく賤ヶ岳の戦いの様子を描いているが、各武将の名前を記しているためわかりやすい。本作も岩の描き方などから矢野派の絵師によるものと推定できるが、人物表現は拙い。

冒頭に蛇の目紋付の長鳥帽子を被り、戸波隼人を討ち取る清正の姿がある。その右隣で笛を構えるのは「木村又蔵」となっている。その上部には加藤嘉明が浅井吉政を討つ様子を描く。画面を左に進む

と、上部では平野長泰が「柴田権六□□」と松村友十郎を討ち、下部では脇坂安治が鷺見源吾を崖から突き落とす。その左上段では、桜井佐吉が宿屋七左衛門と対峙する様子とそれを見て次の戦いへ備える粕屋武則（作中の矢旗には「粕谷助右門宗重」と記す）、その左側では、伊木半七（遠雄）が大寄円右衛門を討つ様子がある。さらに下段では、福島正則と辻郷久盈の対峙、片桐且元と安彦孫左衛門、豊嶋以兵衛、長井五郎左衛門との対峙があり、さらに中川清秀と佐久間盛政の対峙が描かれている。いずれの場面も「賤ヶ岳の七本槍」となった武将たちの戦いの様子が象徴的に表されている。

⑤西村泰久《賤ヶ岳合戦図》 一巻

当館収蔵品DBによると、本作は昭和四三年（一九六八）に現在の熊本市中央区新町一丁目の個人から寄贈されたものとなっている。冒頭右下に「松契園主人画」の款記と落款印があり、矢野派の絵師・西村泰久の作と見られる。泰久は、矢野家六代・良敬の孫弟子にあたる絵師である。

③④と同じく、本作も賤ヶ岳の戦いを七本槍の武将らの戦功を中心には描くが、冒頭だけでなく最終場面で再び清正が登場し、山路正国ともみ合い崖から転がり落ちる様子加えられている。

⑥《日露戦況画報》ほか（印刷） 一巻

当館収蔵DBによると、本作は昭和四五年（一九七〇）に現在の熊本市中央区日吉二丁目（旧・高江町）の個人から寄贈されたものであ

る。

本作は、明治三七年（一九〇四）に始まつた日露戦争の戦況を伝える『日露戦況画報』『日露交戦実況』『征露実況画』などの彩色石版画を上下に二枚ずつ一〇列にわたつて、計一〇枚を貼り交ぜて、横矢旗に仕立てたものである。おそらく、戦中に生まれた男児のために作られたのであろう。

糊付けのため発行元情報が不明なものもあるが、熊本市の「書画堂」、東京の「尚美堂」「名画堂」「松聲堂」「熊澤喜太郎」などを確認できる。また、多くの石版画を手がけた「宮野経茂」の名を確認できるものもある。

濱田辰次郎を店主とする熊本の「濱田書画堂」は、「九州一手特約発行元」となつていて、大正一四年（一九二五）に刊行された『絵画絵葉書類品付属品美術印刷製品仕入大観』（大日本絵葉書月報社）によると、同社は明治二二年（一八八九）に創業し、東京浅草蔵前三好屋書店より石版画を仕入れて販売を始め、明治二七年（一八九四）に日清戦争の戦争画が発行されて以降、図書、額縁の専業店となつた。店主の濱田辰次郎は安政三年（一八五六）生まれで、長男の治平（一八八一年生）に監督させた印刷部も「常に鮮明優秀なる美術印刷物の製作に多大の好評を受け」たという⁹。

⑦ 『救露討独遠征軍画報』ほか（印刷）

本作は、第一次世界大戦中に起きたロシア革命におけるチエコスロバキア軍団救出を名目とした、日本軍のシベリア出兵を伝える彩

色石版画『救露討独遠征軍画報』を横一列に九枚、さらに『教育日本歴史画』一枚、計一枚を貼り付けて仕立てられている。いずれも「画作兼発行印刷者」として東京の尚美堂・田中良三の名が確認できる。

本作の寄贈元の情報は不明であるため、使用地等は不明である。裏打ち紙には未使用の領収書が使われている。

『救露討独遠征軍画報』は戦中に少なくとも一七場面刊行され、『教育日本歴史画』は大正元年（一九一二）前後から大正一二年（一九二三）前後にかけて複数刊行されたようである。本作で確認可能な発行元情報のうち、一番新しいものは大正八年（一九一九）一月であることから、本作は大正八年末もしくはそれ以降の間もない時期に製作されたものであろう。

これらの石版画の発行元である尚美堂の田中良三（一八七四—一九四六）は、昭和初期に川瀬巴水ら新版画の版元となつたことでも知られる。『絵画絵葉書類品付属品美術印刷製品仕入大観』（一九二五年）によると、田中は京都に生まれ、同地に本店を構える辻本尚書堂に勤務したのち独立し、明治三〇年（一八九七）に東京で尚美堂を創業した¹⁰。創業当初は絵画・額画・掛軸類の出版だったが、明治三三年（一九〇〇）に私製絵葉書条例が実施されると絵葉書の出版事業を積極的に展開したという¹¹。

⑧ 矢野派『三国志』 一巻

本作は、令和七年（二〇二一五）一月に熊本市立古町小学校から新た

に寄贈いただいたものである。本作を納める箱の側面に「三国誌絵巻紙幟／杉谷雪樵筆／紫垣隆氏寄贈」との墨書きを確認できる。

しかし、本作には款記がなく、登場人物や馬などにやや稚拙な表現が見られることなどから、熊本藩最後の御用絵師として知られる杉谷雪樵の作とは現時点で断定できず、矢野派系譜の末端に名を連ねる近代熊本の絵師らによる作と推察する。なお、中国の故事にちなんだ横矢旗は、現時点で本作のみであり、他と趣向が異なる¹²。

旧蔵者の紫垣隆（一八八五—一九六六）は、現在の熊本市西区春日の生まれで、熊本の財界・政界の重鎮として知られた人物である。紫垣が現在の熊本市中央区九品寺に構えた邸宅「大凡荘」には教えを請いにさまたまな人物が出入りし、紫垣の自伝的著書『大凡荘夜話』には、県内外多数の著名人が言葉を寄せた。残念ながら、同書には本作製作の背景や古町小学校への寄贈の経緯などについては一切記されておらず、詳細は不明である。

四・当館収蔵の「横矢旗」から考えるいくつかの仮説

以上、当館が収蔵する横矢旗について概略を述べた。先述の通り、横矢旗に関する情報は大変少なく、いつ頃から作られるようになつたのかや市域での分布など詳細は不明である。しかしながら、当館収蔵品や周辺情報を整理するかぎり、以下五点を仮説として考えることができよう。

①横矢旗は幕末頃～昭和初期頃に作られたもので、京町や新町など熊本城下のごく一部の地域に集中して見られる風習と考えられる。

②明治時代に入り、藩御用という形態はなくなるが、横矢旗の製作には矢野派に連なる多くの在熊絵師たちが関わったと考えられる。

③横矢旗の製作工程や受注システムについては不明だが、少なくとも大正時代には玩具店を窓口として流通した可能性がある。④熊本という地域性から、加藤清正にちなむ物語の場面が好まれたが、ほかにも同時代の戦況画を題材にした作品も含まれることから、横矢旗には男児の健やかな成長だけでなく、将来戦地に向かつた際の戦勝祈願も込められていたと推察される。⑤横矢旗に描かれたのは、物語の断片的な場面が多く、絵だけを見る限りでは物語の展開がつかめないため、端午の節句で飾られる際には、絵解きの役割を担う人がついた可能性がある。

依然として、横矢旗の出現時期や巨大化の理由や経緯など、不明な点が多く残っているが、これらの仮説を検証していくことで、今後、関連資料にたどり着くことを期待したい。

五・おわりに

以上、本稿では当館収蔵の横矢旗の概略を報告するとともに、今後の課題として五つの仮説を立ててみた。繰り返すが、横矢旗に関する情報はあまりにも少なく、これらの仮説が今後検証可能かどうか、見通しが立たないのが現状である。

しかしながら、収蔵絵画調査によって数点でも絵師や発行元を確認でき、これまでほとんど言及されることとのなかつた横矢旗の存在を本稿で紹介できたことは、今後の研究の一助となるに違いない。

筆者は、引き続き横矢旗に関する情報を収集し、今回立てた仮説を検証できればと考えている。

注

- 1 竹原明理「〈資料紹介〉椿椿山筆『深水春山像』について」（熊本博物館編『熊本博物館館報34号（二〇二一年度報告）』二〇二二年、九五～一〇二頁）。
- 2 令和六年（二〇二四）一〇月四日～一二月一二日の会期で、前期と後期に作品を分けて展示した。
- 3 元熊本民俗文化研究会会長。熊本県内各地の民俗行事などを撮影・調査した。
- 4 横矢旗に関する語りがほぼ聞かれない中、当該写真が実際に昭和六二年時点でも行われていたものなのか、撮影のために再現されたものなのかは一考が必要であろう。
- 5 野田寛『肥後文教と其城府の教育』（熊本市教育委員会、一九五六年、一四～一五頁）。
- 6 新熊本市史編纂委員会編『新熊本市史 史料編 第九巻』（熊本市、一九九四年、五三二～五三三頁）。なお、大正期の熊本の財界人や文化人を紹介した真栄里正助編『人物熊本』（増補版、新九州社、一九二三年）では、炭谷玩具店は、明治初年の創業で、新町二丁目角の目貫通りに店を構え、炭谷三伍を店主とし、次男の與平次が商才を發揮して経営も安泰であると紹介している。
- 7 松本雅明監修『肥後読史総覧』 一九八三年、一〇七二頁。

- 8 本作では「堀尾勢」の紙が貼付されているが、正しくは「堀勢」のことと思われる。
- 9 『絵画絵葉書類品付属品美術印刷製品仕入大観』（大日本絵葉書月報社、一九一五年、三〇～三一頁）。
- 10 のちに「田中尚美堂」「東京尚美堂」とする。
- 11 前掲載書、八八～八九頁。
- 12 残念ながら本稿への掲載はかなわなかつたが、さまざま日本の中話や伝説を描いた横矢旗（個人蔵）も当館による過去の調査で確認している。

表 1



①松岡敬廉 横矢旗《山崎の戦い》(部分)



②矢野派 横矢旗《九州平定図》(部分)



③矢野派 横矢旗《賤ヶ岳合戦図》(部分)



④矢野派 横矢旗《賤ヶ岳合戦図》(部分)



⑤西村泰久《賤ヶ岳合戦図》(部分)



⑥横矢旗《日露戦況画報》ほか (部分)



⑦横矢旗《『救露討独遠征軍画報』ほか (部分)



⑧矢野派 横矢旗《三国志》(部分)